文化・芸術

「柿」

1915年、絹本彩色、142・0㌢×49・9㌢

速水御舟（1894～1935年）

「日本画なんてこんなに固まつてしまつたんでは仕方がありやァしない。（中略）僕は壊すから君達建設してくれ給ゑ」（今村紫紅のことば）

速水御舟は、画塾の兄弟子であった今村紫紅が提唱した日本画の「破壊」と「建設」を継承し、40年という短い生涯において次々に型破りな画風を展開し、新しい日本画の創造に挑み続けた画家です。

1915（大正4）年作の本作は、御舟の青年期の代表作の一つ「柿」です。大きく二つに分かれた幹から縦横に伸びる枝、緑や赤の葉、たわわに実った柿の実を、余白をほとんど設けず、画面の外へ広がるようにクローズアップして表しています。

この時期、御舟は紫紅を中心として結成された気鋭の日本画家のグループ、赤曜会で南画や西洋の後期印象派の画風を取り入れ、革新的な画風を試みました。その第3回展に出品された本作においても、同時代の花鳥画の主流とは異なる構図や描写に、御舟の革新性がうかがえます。

（佐藤）

《名画の扉》 大川美術館コレクション展から